づけをつかみたい、という念願だけはこの一冊の一言一句にもりこめようとした。この一点をくみとって下されば私にとってこれ以上の幸せはない」と「あとがき」に記しておられる。

第六回リチャード・ストーリー記念講演会報告

大庭　定男（昭17年卒）

母校の旧師・故リチャード・ストーリー教授（オクスフォード大学・日本学、一九一三―一九八二）の人柄と業績を記念する講演会が九三年五月五日、良く晴れた風薫るオクスフォードの日産研究所の新築の講堂で行われた。

ストーリー先生はオクスフォード大学（歴史学）を卒業された一九三七年、母校の講師として来日、商業実践を講義されると共に年齢の余り違わない学生たちと交流を深められたが一九四〇年、日英関係の緊張が高まる中に惜しまれて帰国された。

戦中は中東、東南アジア戦線で活躍、戦後には豪州、オクスフォード大学（St. Antony's College）で日本の歴史、政治の第一人者として活躍、母校を何回か訪問された。緑丘を愛されたことは非常なもので私が伺うといつも『進軍歌』を合唱、小樽時代のアルバムを開いては懐かしがっておられた。

その時から十一年、米寿を迎えられた中野先生の訃報に、我々は思いがけず接しなければならなかった。緑丘を巣立ち、そこで教鞭をとられた中野先生の学恩は、ともに緑丘に学び、そして教えをうけた我々の胸奥に消えることなく生きつづけることを信じて疑わない。

同時に日本よりの留学生達の世話をご夫婦で良くみられ、この恩を感じている旧留学生たちで組織するThe Friends of St. Antony's in Japanが中心となり、一、六〇〇万円の基金を設け、毎年、記念講演会を催し、私は支部を代表して招待されている。基金には緑丘生も多数応募している。また、母校では一九九二年より『日英交流リチャード・ストーリー記念講演会』が行われている。

緒方貞子女史の講演

今回の講演は国連難民高等弁務官・緒方貞子女史が、"The Refugee Problem - Lessons from the Past"と題してアフリカ、ボスニアなどで深刻な問題となっている難民問題につき話された。難民問題と緒方女史の活躍は毎日のテレビ、新聞などで頻繁に報道され、関心も高まっている時だけに多くの人々が詰めかけ、会場は立錐の余地もない程であった。

講演中の緒方貞子女史
その右は　ラルフ・ダーレンドルフ学長

初めに女史はストーリー先生との関係について触れられ『先生の"Double Patriot"（戦前の日本の極右について の研究）という本に刺激され、私は満州事変についての本を纏めました。それ以来、度々オクスフォードに呼んで頂き、講演の機会を与えられ、一九六〇年代には夫（四十郎氏・当時日銀駐在員）と共にロンドン滞在中は度々お目にかかれたことを懐かしく思い出します。』と述べられた。

次いで、難民対策の話に移り、旧ユーゴスラビア、ソマリア、ケニア、アルメニア、アジェルバシャン、トーゴ、ベニンで現在三百万の難民の保護にあたっている。また、今までにカンボジアの避難民をタイより帰国させたように一五〇万人を帰国させている。

このような難民問題は昔からあった。フランス革命の際に英国などに逃れたもの、中国革命の際日本に逃れたものなどがあったが、これらはグループとしての難民で受入国と宗主国との関係が損なわれない限り問題なかった。第二次大戦後は、グループでなく、個人として扱うようになり、一八五一年に国連に現在の機構が作られ百十四カ国が加盟している。

国連難民機構は『一時的に保護する』ことを原則とし、できるだけ早い機会にもとの国に返し、好評を得ている。

講演終了後次のような質疑応答があった。

1）『ボスニアの例が示すように人道援助から始まったものが軍事作戦色が強くなっているが』

答）一年半前からユーゴに行っており、当時は五十万人に対し援助が必要と思われた。それが現在一二〇万人が主としてボスニアより近隣国に

せられた。「子どもを守る会」ではこれを機会にこの若者たちのつどいを開く計画をたてた。

この青年たちと一度ゆっくり話がしてみたいと考えていた先生は、このつどいの席として我が家の茶の間を提供する。その年の九月のある夜、中野家の八畳の茶の間は八人の客人で満員になった。この八人から始まった「あゆみグループ」は六年で百人にふくれあがる。若者たちは先生を〝おやじ〟、千歳夫人を〝かあさん〟と呼んで親のように慕って集まってくる。定例集会は月に一回の筈だったが、暇を見つけると彼等はちょくちょく先生の家へ顔を出す。考えてみれば、ほかに行くところがないのかもしれないと、先生は彼等が遊びにくるのにまかせておく。青年たちは先生の家の茶の間の一隅に二つの施設をつくった。一つは「喜生箱」と銘うった小さな木箱である。この部屋を訪れたとき、もし余分な金があったらこれに入れておいて、困ったときに自由に借り出すことが出来るというきまり。もう一つは「よろず帖」というノートである。話したいこと、聞きたいことなどを会えなかった友達に伝える伝言板の役目もするし、ときには単なる落書用紙にもなる。

「かつては集まるだけでせい一杯だった孤児たちは、いま大きく社会的にも目を開いていろいろと考え合う仲間たちになった。そして社会学上の研究から出発した私もいつか、彼等の仲間として真剣に議論し合う仲間となってしまっている――。」

嵐のように私を巻きこんだ彼等は大人になった。長い間楽しかった。元気でいろよ、ぐらいしか私に言えることばはない。」

とこの文章は結ばれていた。

本当に久しぶりに先生のこの感動的な文章を読んで、広島大学気付で早速便りを差しあげた。昭和十四年春のお別れした時の思い出、「民族研究所紀要」を読んだときの感銘などなど。先生から、高商時代の黒板でみた独特の丸味をおびた字のなつかしいお手紙を頂いた。「民族研究所紀要御保存していて下さる由、望外の幸せです。あの一篇は、私の拙論中では一番の長いもの。あの時なりの心血をそそいだ一篇でした。世界の平和を考える時、国家や民族の問題は素通りを許さぬ難しい問題ですが、いつかまた、あれを織りこんだ新しい一篇をと、考えたりしています――。」一別以来三十年以上の歳月がいっぺんに凝縮された思いで、お便りを繰返し読んだ。

やがて先生は宇治市に居を移されたが、当時業界誌等に書いた数々の拙文をその都度お送りし、先生からは励ましのお言葉や感想を頂いた。

そして昭和五十一年の晩秋、既に第二の職場に転じていた私は、神戸で単身赴任の時を過すことになった。そんなある日、先生のご都合をうかがって、丁度神戸に来ていた、今は亡き妻と共に宇治のお宅を訪れた。京阪黄檗の駅をおり、電話でおききした道をゆくと先生が私共を迎えに出て下さっていた。昭和十四年春

お別れしてから戦争をはさんでの長い歳月を超えて、今こうして変わらぬ先生のお元気なお姿とお声に接して、去来する感慨は無量であった。初対面の奥様も小樽生まれの方で、昔の小樽の思い出や、学校の頃のことなど、次々と話題はつきなかった。先生御夫妻は私共を京都に誘い、東山連峯の裾にある、あまり観光客のこない静かな寺をいくつか案内して下さった。優雅なたたずまいの古い寺や庭をめぐり、錦繡の京の秋のそぞろ歩きを楽しんだ。

昭和五十七年一月、先生は喜寿を迎えられた。

「今まで余り書物を公にしてこなかった私のことだし、それでいて書きたいことが沢山にあり、そのためのメモや下書きも沢山たまっているのだから、このさい三冊か四冊、書物をまとめてみようか」と思いたった先生のお気持に呼応するかのように、何人かの教子達が「中野清一先生喜寿記念刊行会」を発足させ、三百人近くの有志が賛同し、五十七年七月、「広島・原爆災害の爪跡」が京都蒼林社から刊行の運びとなった。「はじめに」、「第一部・原爆の体験記録」、「第二部・原爆第一号の調査記録」「第三部・被爆者救済活動と原水禁運動」、「あとがき」の構成で、二百九十四頁。「第二部」、「第三部」は二十年以上も前の古い書きもの、「はじめに」と「第一部」はその年の一月から二月にかけて書きおろしたものを一冊にまとめた。

「文章表現やその内容の上で果たして一貫しているかどうか心もとない。だがしかし、今の世界にとって一番に大切なことは世界平和であり、そのためのささやかながら一つの裏

大いに失望した。満州国へ旅立たれる直前の先生を囲んでのゼミナリステンの寫眞が今も手許に残っている。

昭和14年3月10日
中野教授送別会
前列左から二人目　中野先生
左から四人目　筆者

時は流れて昭和十九年、既に大東亜戦争は苛烈の様相を濃くしていた。私は十八年秋召集を受けて旭川から上敷香へ、そこで病を得て陸軍病院に入院、やがて召集解除となり、佐渡が島の兄のところで療養の日々を送っていた。ある日の新聞で「民族研究所紀要第一冊」発行の広告を見て早速取り寄せた。昭和十九年八月十五日初版である。今から思えば終戦一年前に、紙質は上等ではないが、四百頁の大冊でしかも大判のこの本がよくも印刷発行が可能であったものと驚きを覚える。所長高田保馬博士の創刊の辞と「民族政策の基調」の論文に続いて、「東亜に於ける民族原理の開顕」なる五十頁の先生の論文が掲載されている。

＊

大東亜戦争の指導理念としての東亜の諸民族に「所を得せしめる」という独自の標榜は豊かな内容を直観的にとらえている。この内容を概念化し、理論的に組織づけ具体案策定に資したいと独自の理論を展開していく。「所」とは何か、一面各民族の「位置」（「地域」）であり、他面各民族の「能力」（「分」）である。「得せしめる」とは何か。その位置を正し、その分につかしめる事である。ところで位置というも分というも、各民族相互間の一定の相対し方を前提とする。相互に補い合うという関係にたたねば位置を正す事も分につかしめる事もできぬ。この必要な前提を名づけて民族補完の立場と呼ぶ。

民族補完の立場の根底には次の二つの立場がある。一は広民族－東亜民族の立場、他は民族秩序の立場。補完の間柄にたちうるのは各民族を包む一体的なものが、ある程度現実に与えられているからである。かくして諸民族補完の出発点として広民族現実がある。又補完の働きを各民族が営むというのは共同の目標に向かっての事である。かくして諸民族補完の到達点は広民族の理念である。更に又民族補完の現実における進行が正しきものであるためには先後の序列が整っていなければならぬ。かくして民族補完の立

場は民族秩序の立場により運営上基礎づけられている。広民族－東亜民族の立場、民族秩序の立場、民族補完の立場を根幹とする事により民族問題処理上の最も新しき原則がここ東亜の天地において、日本の先導によってまさに開顕しようとしている。

この最も新しい原則は欧米的な古き原則－所謂民族原則を根本的に批判しつつその上に超えようとする、所謂民族原則には三つの形態がある。その第一は西部ヨーロッパ的な一民族一国家の立場、第二は中部、東部ヨーロッパ的な民族自律原則、第三はソ連邦的な民族自決論である。この旧き民族原則の三形態を貫く共通な独断－民族の独我的、排他的独往の見地－これをヨーロッパ的独断と名づけるなら、我々の新しき立場－民族原理のそれはこの独断を根本的に処置しようとする。そのために大事なのは平等観念についての通見の徹底的な更改である。他に追ひつき、追ひつけばやがて離れ去るという種類の平等は、平等本来の面目ではない。背反のための平等ではなくして統合のための平等。平等観念の久しきにわたる誤用を匡す事によって民族原理の立場は、各民族の立体的なる等権を認めつつも厳しき相互錬磨を要請する事になる。

＊

以上が本論文の要旨であるが、当時のややもすれば神がかり的な空疎な観念論とは異なり、極めて独自の特徴をもつ、西欧の理論を超克した独創的な論説であって、現在にも立派に生き通用する理念である。

さらに時は移って、昭和三十六年、「文芸春秋」九月特別号に「ヒロシマに甦った青春」と題して、広島上空に開いたキノコ雲は消えても、原爆孤児たちの苦悩は消え去らない、これはそんな若者たちとある大学教授夫妻の物語であるとして中野清一先生の物語が掲載された。

「最初私が横浜国大から広島大学へ転任してきたのは昭和二十四年だった。広島という所はいろいろと難しい場所だからよした方がいいよ、などと言ってくれる人もあったが、私はあえて広島大学を任地に選んだ。原爆という未曾有の経験を負わされた広島市民は社会学を専攻している私にとって、どうしても研究せずにはいられない引力をもっていた。その一つは『家族』という集団がはたして人間社会でもっとも優位にたつ集団なのだろうかという疑問だった。昭和二十年八月六日、広島の上空にあの巨大なキノコ雲がわいたとき、人はどういう行動をしたか。」先生は広島へ来てしばらくして「広島子どもを守る会」の理事にさせられた。この会が原爆十周年にちなんで、原爆孤児たちの手記「私はこうして生きてきた」を募集したときも、純粋に学問的な興味のほうが強かった。どんなに悲惨であったかは問題ではなく、ぎりぎりの限界状況を経験してきた彼等の手記の中に描き出される人間関係とはどんなものであろうかに興味をもった。期日が来て十八人の青年男女の切々と胸をうつ半生記が寄

中野清一先生逝去

本間誠一（昭11年卒）

私達昭和十一年卒業生にとり、最後の恩師である中野先生が、平成五年七月二日宇治のお宅で逝去された。このことは当時の日刊紙で報道されたので既に周知のことと存じますが、他方先生を知っておられる緑丘人もごく少数になったことも事実なので、この際中野ゼミの一員として母校出身の先生の足跡の一端に触れることをお許し下さい。

明治三十八年（一九〇五年）一月生まれの先生は平成五年八十八才。大正十五年小樽高商から九州帝国大学に進み、昭和四年同大学卒業とともに、直ちに母校の数少ない文科系の先生として赴任され、哲学・社会学・心理学等を担当、緑丘アカデミズムに異彩を放っておられたが、昭和十四年春、当時満州国の首都新京の建国大学教授として招聘され、私もお供して同大学の研究員助手として大陸に渡りました。

二年後、私は病をえて帰国、先生も昭和十九年には、恩師高田保馬先生が所長をしておられた国立民族研究所に移られました。

戦後は一時糸魚川先生が校長であった横浜経専（現神奈川大学）に、さらに昭和二十四年、広島大学に移られ、原爆が社会に及ぼした影響を学問的立場から研究されました。昭和四十年には立命館大学の末川　博総長に招かれて、同大学に移られ学生の信望を集められました。

昭和五十一年、定年退職後は、終生の研究テーマである「社会学と経済学の相関年表」の作成に心血を注がれました。

先生の喜寿を記念して刊行された、中野清一編著「広島・原爆災害の爪跡」（蒼林社・昭和57年出版）は、広島における先生の調査研究、社会活動が集大成されたものであります。

葬儀に参列出来なかった私は、去る十一月、宇治の名刹「万福寺」の墓地に眠

墓前の長男晨一さん

られる先生のお墓にお参りしました。先生の戒名は『芳徳院積学清雲居士』。案内して戴いた、ご長男の晨一さんは大阪の毎日新聞社関係の会社の役員をされており、まだ幼かった同君と再会したのは実に六十年振りでしたが、あまりに父君に生き写しなのにはびっくりしました。

追悼・中野清一先生

鎌倉啓三（昭15年卒）

「広島大名誉教授、元立命館大学教授中野清一氏平成五年七月二日午後十一時五十分肺炎のため、京都府宇治市の病院で死去、八十八才」と七月四日の各紙朝刊は報道した。

先生は明治三十八年一月十四日小樽市に生まれ、北海商業から小樽高商に入学、大正十五年主席で卒業、九州帝国大学法文学部に進み高田保馬博士の門下で社会学、経済学を専攻、昭和五年三月卒業と同時に母校小樽高商の講師となり、翌六年教授に就任した。論理学、心理学、社会学、哲学を受持たれたが、昭和十四年四月満州国建国大学に移られた。その後昭和十八年十一月には新たに設立された国立民族研究所所員となり、終戦後横浜工業経営専門学校、次いで横浜経済専門学校を経て昭和二十四年八月広島大学政経学部教授に就任、三十六年には政経学部長となったが、四十年三月退官、名誉教授の称号を受けた。四十年四月から五十年三月までは立命館大学産業社会学部教授として引続き講壇に立っておられた。

昭和十二年入学の私は一年、二年と先生の論理学、心理学の講義を受け、二年生の後半にはプリ・ゼミナールの原書購読に参加し、三年には社会学の講義を聴くつもりであった。ところが昭和十四年三月先生は突然緑丘を去って建国大学へ移られたので、先生の講義を楽しみにしていた学生は驚き且つ

三男晧一君も大阪、二男は東京でアサヒビールにお勤めとのこと。奥様は生憎健康を損なわれ入院中でした。

なお終わりに、今から十二年前、我々の卒業四十五周年記念文集「吾れに友あり」に寄せられた、先生の玉稿の一節で結びと致します。

『人間の可能性は無限。それと矛盾するようだが、人間の不可能性もまた無限。為し能う無限と為し能わない無限、この二つの無限の間に人間の故郷がある』

ジンメルの「遺された日記」より

緑丘

●特別寄稿
ガット農業問題　国際シンポジウムの成果
－後援会助成金への感謝をこめて－ ……本間　正義 … 2
イタリアからの使者
－経済学者ガリアーニー ……丸山　徹 … 5
●ビジネス最前線
最近の外食産業と経営の課題 ……小原　芳春 … 11
●エバーグリーン講座
平成五年度エバーグリーン講座の開講 ……青木　雅明 … 17
エバーグリーン講座を終えて ……鵜野　好文 … 20
●事務局便り …… 23
●随想・手記・短歌・俳句
花の生涯 ……神部健之助 … 26
四ツ谷勇君の思い出 ……寺尾　八郎 … 27
中野清一先生逝去 ……本間　誠一 … 28
追悼・中野清一先生 ……鎌倉　啓三 … 29
第六回リチャード・ストーリー記念講演会報告 ……大庭　定男 … 34
（浜松市民文芸賞受賞作品）
「スミルニキーさんの御飯」中野みつ著にそえて…山田　次朗 … 36
俳句（作句、鑑賞）10のチェック（三） ……松橋　玄光 … 42
第五回大北辰会（北斗寮ＯＢ会） …… 48
句苑緑丘〔25〕 …… 51
●追　悼 …… 53
物故会員 …… 57
緑丘往来 …… 58
学園だより …… 66
支部だより …… 76
同期会だより …… 82
緑の紙風船 ……116
会館利用日誌 ……121
会員異動通知 ……124
編集後記 ……135

表紙画　尾形圭介（昭34卒）

明日の健康を
真剣に考える
あなたに。

●お酒をよく飲まれる方へ
カイカン クラブ
快肝 倶楽部
小麦胚芽エキス、酵母エキス、甘草エキス、小麦エキスをバランスよく配合しました。

●小麦はいが油で包んだβ-カロチン
ビタベータ
VITABETA
野菜不足・野菜ぎらいの人、たばこをのむ方に特におすすめします。

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-5
TEL 03（3350）2311
相談役　香木　正雄（昭和16年後期卒業）

日本製粉株式会社

小樽商科大学同窓会報第75号

緑丘

社団法人　緑丘会

緑丘〔第七五号〕

平成六年二月二十五日

緑丘会東京事務所

〒170 東京都豊島区東池袋三―一―一サンシャイン60（57階）

電話 〇三（三九八一）―二三四〇

社団法人 緑丘会

合同酒精

合同酒精専属 藤木三郎 プロゴルファー

うまさパワフル、ビッグマン。

ビッグなうまさに乾杯／ゴードーの焼酎ビッグマン。技とうまさが光ります。オンザロック、ストレート、お湯割り、お好きな飲み方でどうぞ。うまさたっぷりのビッグマンです。

GODO
ゴードーの焼酎
ビッグマン

ビッグマンカップ（200㎖〈一部地区〉20% 150円・25% 170円）
（1.8ℓ 20% 1,050円・25% 1,170円）（2.7ℓ 20% 1,490円・25% 1,680円）
（4ℓ 20% 2,140円・25% 2,460円）（5ℓ〈一部地区〉20% 2,670円・25% 3,060円）

価格（希望小売価格）は、すべて消費税込みです。

飲酒は20歳を過ぎてから